

第 1 回 第四次稲城市教育振興基本計画策定委員会 議事要旨

日 時 令和 5 年 11 月 7 日（火）午後 7 時～9 時 10 分
場 所 稲城消防署 3 階 講堂
出席者 （委 員 長）藤城委員
（副委員長）加藤委員
（委 員）恵方谷委員、前田委員、藤田委員、渡邊委員、山口委員、
狩野委員、遠藤委員、鈴木委員、戸延委員、杉本委員、
岡野委員、佐藤委員、岸委員
（事 務 局）長崎教育総務課長、涌田教育総務係長
コンサルタント 1 人
傍聴者 1 人

会議の概要

1 委員委嘱

教育長より各委員に委嘱状を交付した。

2 稲城市教育委員会教育長挨拶

教育長 委員の皆さまには、大変ご多用の中、本委員会委員へのご就任をご快諾いただき、感謝申し上げます。加えて、皆さまには、日頃から稲城市の教育にご理解・ご協力を賜り、また、稲城の子どもたちを温かく見守り、ご指導・ご支援いただいている。重ねて、深くお礼を申し上げます。

稲城市教育委員会は、教育基本法に基づき、稲城市の目指すべき姿とその実現に向けた教育振興基本計画を策定しており、この度、第四次となる稲城市教育振興基本計画を、令和 5 年度と令和 6 年度にかけて策定作業をすることとし、皆さまには、その策定に向けた組織の委員をお願いしたところである。

文化の秋を迎え、本市では、市民祭りや市民文化祭・芸術祭が開催され、また、各学校でも、今、文化的行事が次々と開催、繰り広げられている。

私自身は、教育長として、初めてこの秋の季節を過ごし、稲城市は本当に市民の皆さまの文化や芸術への意識が高く、また、地域社会が子どもたちの学びや健全育成にしっかりと関わろうという思いが強く、温かい地域ということを改めて感じている。

このような市の特性を踏まえながら、私は、本市の子どもたちに、次代を担い、次代に活躍する生きる力をつけて欲しい。そして、豊かな自然環境が維持されつつ、まちとしての開発も進められ、ますます活気づいている本市において、それぞれの世代の市民の方々が、より豊かな人生を歩むため、地域全体の学びの充実を図りたいと考えている。

今後、国や東京都の動向にも注視しつつ、本市ならではの教育施策の基本となるビジョンを作成していただきたく、よろしくお願いいたします。

本委員会は、市内大学の先生、そして、市内公立学校校長会、保護者の方、社会教育委員、スポーツ推進委員、民生・児童委員、青少年委員といった各組織の代表の皆さま、さらに、一般公募から選出させていただいた市民の方々、加えて、稲城市の関係各部長から構成されている。

委員の皆さまは、それぞれの立場からの視点を生かされ、また、これまでの豊富な経験に裏付けられた知見・考え等、活発にご意見をいただきたい。

今後、長い期間の策定をお願いすることになるが、よろしくお願いしたい。

3 自己紹介

各委員の自己紹介及び事務局の紹介を行った。

4 委員長及び副委員長選出

第四次稲城市教育振興基本計画策定委員会設置要綱第5条に基づき、委員長に藤城委員、副委員長に加藤委員がそれぞれ選出された。

5 教育振興基本計画策定の概要

事務局より、資料、別紙1、第三次稲城市教育振興基本計画（冊子）に基づき説明があった。（質疑、意見なし）

6 策定スケジュール

事務局より、別紙2に基づき説明があった。（質疑、意見なし）

7 アンケート調査

事務局より、資料、別紙3～7に基づき説明があった。

〔質疑応答〕

委員 今、各学校では、不登校の子がいるような状況である。そういう子から上がってくる回答の方が、どちらかというと聞くべき内容ではないかと感じている。学校で、別紙3・4の表紙部分を配り、そこから子どもたちがタブレットで回答するというので、これはもしかしたら学校の運用の話かもしれないが、学校でみんながいるクラスの1時間を取ってやるものなのか。紙を配るのであれば、学校にはちょっと来られないというような子どもの手元にも届いて、アンケートを回答する機会があるのか。

また、このアンケート対象は各学年から2クラスということだが、そうすると特別支援学級の子どもたちは対象としては外れることになるのか。

事務局 まず、学校を休んでいる児童・生徒への対応について。教育委員会事務局から学校に依頼するに当たっては、学校の教育課程における授業時間の問題もあるため、学校で回答する時間を取っていただくのか、宿題になさるのかということについて、こちらから「こうしてください」というお願いはしない予定である。そういった中で、休んでいる児童・生徒にも回答していただくことは大切であり、可能な限り回答してもらえるよ

うに学校にはお願いする考えである。校長先生方、いかがか。

副委員長 それでいいと思う。

委員 これはメールで送らないのか。今までは紙でやっていたのでその場で終了みたいな感じだったと思うが、オンラインにすることで、自宅でも回答が可能なのかなと思った。あくまでも、これは無記名なので、その子たちの把握は個別対応するしかないというふうに感じた。

事務局 メールだと、Google のアプリの Classroom 等、そういったところを活用となる。指導部局とも相談しながら進めていきたい。

委員長 大学の教員からメールと Classroom から連絡をしても、学校に来ていない学生はまず見ないというか、そもそも学校からの連絡にはちょっと触れたくないという学生もいるので、メールだったら読むかという、おそらく読まないかもしれないと思う。ただ、プリントプラス何かみたいな形で少しでも届くといいのかなというふうには思った。

委員の2つ目の質問の特別支援の方はいかがか。

事務局 基本的には、今、普通学級の児童・生徒ということで予定しており、特別支援学級への配付は考えていない。

委員 わかりました。ありがとうございます。

委員 質問内容のことについて。今、人権の方でも、中学生に夏休みに人権作文を書いていたいたりしている。5年前の調査のときになかったことだが、最近、やっぱりLGBTQのことが入って来ている。親には言っていないけれども、実はこうこうでみたいな文章があったり、友達には言っているけれども、ほかはごく一部だけで知らないという話も書いてくれている子が出てきている。私がいろんな相談を受けたりする中にもそういうのが増えてきているということで、特に中学生調査の間10「あなたは、困っていることや不安なことがありますか。」には選択肢6に「からだのこと」というのがあるが、この中にそれも全部含んでしまっているのかというのが疑問だった。

委員 それは、「その他（具体的に： ）」の選択肢でカバーできるのではないか。

事務局 からだのことと受け止めて、選択肢6を選んでいただくこともあると思う。具体的に書いていただければ、「その他（具体的に： ）」の選択肢のところで書いていただくこともできるのではないかと考えている。もしくは、一番最後の自由記載欄で具体的に書いていただくこともできるのではないかと考えている。

委員長 委員は、あえて1項目立てた方がいいのではないかというご意見か。

委員 そこまで書いていいのかどうか、私もわからないところではある。小学生はいいと思うが、中学生はその辺が「からだ」と言われてLGBTQのことがピンと来るかなというのが疑問だった。

委員長 例えば、性・性別について、のようなことで入れるとか、そういうことか。

委員 そこまで書くべきかどうかというのは、やっぱり疑問ではある。それもあるって、校長先生方はどう思われるかお聞きしたい。

委員 そこをLGBTQとピンポイントにする必要があるのかなというのも感じる。からだのこと全般でという、大枠の質問なのかなというふうに私は捉えていた。

委員長 LGBTQが、からだとも限らない。

委員 なので、その辺がどうなのかなというのがあった。「からだのこと」に○を付けてもらって、実はこうなんですというのを中学生が書いてくれれば、それはそれで一番いいことだと思うが、どうなのかなと思った。

副委員長 設問をどう置くかというのは、そのあとの、その結果をどう生かすかというところにも関係すると思う。今回、LGBTQに関する設問をしてある程度の人数が出たときに、そのあとに教育施策として何をするのかというのをある程度見通して設定するのならいいが、ただ聞くだけであればあまり意味がないのかなと思う。

委員長 今、大学等の高等教育機関では、その配慮ということで必ず調査をしないといけないことになっている。例えば、健康診断であるとか進路であるとか、あるいは就職のときに願書に自分の性別をどう書くかとか、そういうことに全部関わってくるみたいところで、もしかしたらそれはキャリアの選択とかいろいろなところに関わってくるかもしれない。

ただ、そういうことを小・中学生の段階から聞いた方がいいのかどうか。その点では、性別だけではなく、本当は経済的な問題、貧困の問題等もあるだろうとは思いますが、ここに入れて何か対応ができるかどうか。困っていることはたくさんあると思うが、どう生かすかということ次第というのはあるのかなと。副委員長のおっしゃる通りかなというふうに思った。

委員 別紙3の9ページ目、問13-1「あなたが、これらの施設を使わないのはなぜですか。」について。図書館とかを使いたいのは、Wi-Fiを使いたいからとかそういう理由とかが多いと思う。施設ごとにWi-Fiが設置されているのかどうか私は把握していないが、ここにWi-Fiとかを書けばいいのではないかなと思った。保護者の方はいかがか。

委員長 Wi-Fiの設備とか、「使いたい設備がないから」みたいなことか。

委員 おっしゃる通り。決定事項であるならいいが、そういう側面でお願いしたい。

委員長 子どもが使うときに、何で図書館に行くかとか、そういうことを今お考えいただいたということによいか。

委員 そういう姿を見るので。パソコンがないかどうかとか。図書館とか児童館に何があるのか私はわからないが、Wi-Fiとかが利用できるのであれば、結構利用する子も多いのではないかなと思った。

事務局 こちらは「使わないのはなぜですか」という設問で、施設の不満点というところになるかと思うので、Wi-Fi等の設備がないからとか足りないからといったところを加えて、さらに具体的に聞かせていただくことはできると思う。

委員 あまり具体的にするとよくないのかなと。

事務局 具体的にするとよくないということではない。いろんなことを聞こうと思って、今回、10項目ほど出しているの、さらに設備をということが、問題あるとかよくないとかいうことはない。さらに設備ということはあるかなとは思っている。

委員 委員長が言ったような言葉をここに入れたらいいかなと思う。

事務局 よろしければ、前向きに検討したいと思う。

委員 何点か大項目があるので、一つずつお話させていただこうかと思う。

1点目は、今回のアンケート調査に関して、ネットでやるという方針は大変いいと思うのだが、そこで回収率が減るから対象者を増やしたという考え方にはちょっと引かかるものがあった。回収率が減るということは、先ほど委員からの質問があったように、答えたくない人、答えられない人、それから、小学校3年生だと設問の言葉がわかることとわからないこととかあると思う。それが偏ったときに、そういうわからない人を排除して、普段、得意にしている人が残るようなことになると、アンケートの結果が今までと偏ってくるのではないかということをやっと心配した。その辺について、何か対策をしていただけるといいなと思う。

小学生の場合、やはり学校で配って回収するとなると、先生が「おい、誰々出していないぞ」みたいな感じになって、ちょっとプレッシャーがあると思う。家に持ち帰ってやるとなると、たぶん匿名になると思うので、誰が出したのか出していないのか、先生が把握できないと思う。そのときに、単純に回収率が下がっただけで、回答したくない子、あるいは家庭の事情でできなかった子、いろいろあるかと思うが、そういうちょっと辛い状況にある子たちの意見が抑えられてしまうと、せっかくのアンケートが残念な結果になるかなと思い、そこをやっと心配した。

委員長 紙のときには学校で回答していたから、強制ではないと言いながらも、ある程度の強制力みたいなものが働いていたけれども、持ち帰りになると、回答者層が変わってくるのではないかなというようなご懸念ということか。

委員 そうである。

事務局 これまでは授業の中で紙でやっていたので、回収も紙でしていただいたということで、学校にかなりご負担いただきながらやっていたところがあった。今回はオンラインでやればその辺は省力化され、集計も省力化される。

おっしゃる通り、それによって、紙であれば回答していた方が回答できないというのはあるかと思うが、アンケートとしては原則任意ということで考えている。

児童・生徒の回収率はこれまでは100%に近かったが、任意という考えの中で、そこはやむを得ない。回答しなかった方が一概にそういう回答できない事情の方だけなのかどうかもそこはわからないところなので、任意という中でやるしかないと思っている。そこで学校の先生方に、回答したかどうかを生徒にこまめに聞いていただく等すれば上がるかもしれないが、そうすると、今回、オンラインにした効果というところも。学校の働き方改革という中での負担軽減というところも非常に重視させていただいているところがあるので。

委員長 今回は第四次だが、第五次、第六次と続いていく中では、今まで児童・生徒に関しては任意といいつつも任意になっていなかったところを、しっかり任意として今後も継続していければというような。むしろ、今までがちゃんと任意になっていなかったところを任意にしていくということによろしいか。

事務局 もちろんである。今後はこのオンラインの方式を継続していくと思うので、委員長のおっしゃる通り、ほかのアンケートと同じように任意という考え方が貫かれると思っ

ている。

副委員長 より多くの人の意見を聞きたいのであれば、各学校の学年の2クラスを選ぶとなると、4クラスある学校については2クラスの子の意見を最初から聞かないことになってしまう。オンラインにして省力化できるということであれば、全児童・生徒に実施するくらいのつもりでやると標本数が増えると思うのだが、いかがか。

委員長 支援級も含めてということか。

副委員長 回答できるかどうかは別になるが、そういう機会を与える必要はあるのかなというふうには思った。

委員長 だいたいの数が違ってくるけれども、どうなのか。

事務局 指標のところは前回との比較をするため、前回並みの母数で回答いただけたらということで、今回、回収率が少なくなるというところで1クラスから2クラスにさせていただいた。全クラスとなるとかなり増えてしまうと思う。母数が増えることでどうなるかというところもあるので、どのように考えるかというところ。

委員 こういうアンケートは、本来、回収率を上げるために、例えば市場調査等では、街中で声を掛けられて、回答された方がテレホンカードとか図書券とかをもらえたりする。そういうインセンティブというのが回収率を上げることになると思う。

もちろん市の場合、お金とかそういったものは無理だと思うので、何が答える気にさせるかなと思うと、例えば、「前回のアンケートでこういう回答があったので、実際にこういうことをしました」、「こういった回答があって、こういうふうに困っている方がいたので、こういう相談窓口をつくりました」とか、そういった実績みたいなものを見せることで、もしかしたら市が自分の悩みに応えてくれるかもという気になるのではないかなと思ったのだが、そういうことは可能か。小学生はまだピンと来ないかもしれないが、中学生であれば理解できると思う。

事務局 実態を伺うというようなアンケートで、こういった具体的な要望を集めて、それをこちらで対応していくというようなアンケートではないので。「こういった意見があったので、こういった対応をしました」というような、すごく伝わるような形の対応というのがそれほどないかもしれない。答えていただくことで、こういった傾向が見られるというところになってくるので、「アンケートによってこうなりました」というような形を見せるというのはちょっと課題があるかなとは思っている。

委員 そうすると、母数がちょっと減ってしまうのではないか。

事務局 委員がおっしゃる通り、確かに回収率を上げていく工夫という意味ではやっていかなくてはいけないので、何かそういったものができるといい。

委員 そういった面では、何のためにアンケートをするのかという趣旨説明はされるのか。

委員 「稲城市の学校づくりやまちづくりに生かしたいと考えています」と書かれているが、そんなにはっきりとは書かれていない。どうやって生かされるのかイメージできない子もいるのかなという気はする。

委員長 では、その辺りは何か工夫ができそうであれば。

事務局 「こういうためのアンケートです」というところはもっと伝わるような表現ができ

たらと思う。あとは施策で、「こんな施策ができました」というようなことが言える部分があれば、そこは考えてみたいと思う。持ち帰って検討させていただきたい。

委員 2点目は、回答者の居住地については質問しないのか。例えば、さっきの施設の設問で「遠いから」と答える人は、どの辺の人たちが遠いと思っているのかとかそういう分析になるかと思う。そういった意味では、今、スポーツクラブとかやっている上では、地域性というのは結構大きいと思っている。そういうのを聞いてはまずいから、今まで抜いていたのかどうなのか。

事務局 市民アンケートについては、居住地区を聞かせていただいている。ほかのアンケートについては、学校ごとの回答は把握できるので、その辺の地域性については確認できると思う。

委員 ネットにしても、その辺は学校が混在しないように区分できるのか。

事務局 はい。このアンケートフォームでは、この学校でこういう回答があったということは把握できる形になっている。

委員 質問項目がなかったのだ。

事務局 失礼した。学校については、クロス集計はしない。そのため、学校については地域の確認はしていない。

委員 それはした方がいいのではないかと思うので、ご検討いただければと。

事務局 学校名をお答えいただくかどうかというところにはなろうかと思うが、持ち帰らせていただく。

委員長 学校名を答えなくても、市民アンケートと揃えて自分が住んでいる地区を答えてもらうことは可能なのか。

事務局 入れることはできる。

委員長 むしろ、学校名というよりも、自分が住んでいる地区だけ入れることは可能なのか。どうすれば個人が特定されないで回答してもらえるかを考えていた。

クロス集計の計画等もあると思うので、改めてご検討いただければと思う。

委員 最後に3点目が、スポーツに関して、iクラブの項目を外されているところ。個別にiクラブを聞くというのは確かに違和感があるので、それはいいと思うのだが、スポーツクラブに関して日常スポーツということの観点が抜けているのではないかと思った。iクラブとか体育協会とか体育館で教室をやっているところとか、いろいろなクラブがあると思う。そういうところに対しての要望というのを聞いてあげた方がいいのではないかと思った。ご一考いただければと思う。

事務局 日常スポーツというのは、自分自身がどれくらいの頻度でスポーツを行っているか、どこかに属してと行っているということか。

委員 そういう属すところがあるかとか。iクラブの設問では、「事業や教室に参加したことはない」だとかいう選択肢があったと思う。

あと、そういう団体なりサークルなりに加わるのにどんな障害があるか、というような一般的な質問をしたらいいのではないかと思った。

委員長 入れられそうかどうか、またご検討いただくということでよろしいか。

事務局 スポーツをしている場所というのは聞いている。どのような形で運動されるかというところか。

委員 そうである。スポーツに参加しづらいと思っているならば、何でなのかとか。していますか、していませんか。さらに、どういう状況が揃えば参加したいと思っていただけるかとか、そのような質問があるとよいと思った。

事務局 例えば、別紙7「市民アンケート（案）」の問16－8で「運動やスポーツをしなかったのは、どのような理由からですか」という項目は設けている。

委員 iクラブも含めてだが、総合型とかスポーツサークルとかそういうのに対しての要望というところまで深く掘り下げて質問していただけるといいと思った。

事務局 その団体へのご要望ということでよいか。

委員 そうである。iクラブとかでメインにやっているのは、どちらかという日々の運動の方を重視している。イベントもちろんあるが、イベントだけではなく、日常の運動というのが、一人市民スポーツという意味では重要なことかなと考えている。1回もしなかったとかそういうのではなく、普段からスポーツをやっているかという観点の質問がいいのではないかと思ったということである。

事務局 どこかの選択肢で聞けるところがあるか、検討させていただきたい。

委員長 例えば、「健康日本21」に入っているようなスポーツ、運動の項目と対応させる手もあるかもしれない。1日何分以上汗をかく運動をしているかみたいな。そうすると、全国の平均とかとも比較ができるみたいなこともあるかもしれない。

事務局 そこは検討させていただきたい。

委員長 ほかにいかがか。

委員 中学校の方で、先ほど副委員長からも母数が増えた方がというようなご質問があり、別の会議では課長から2クラスということのお話があった。本校でいうと3クラスあるので、そこから2クラスを抽出するというのはなかなか難しいなあということを思っていた。数の関係で、第三次のときと比較して、やはり2クラスということで認識してよろしいのか。

事務局 これまではずっと1クラスだったが、今回は回収率を心配して、クラス数を倍の2クラスにさせていただいた。あまり母数が減らないようにという配慮ではあった。さらにというご意見を先ほどいただいた。

委員 だから、そこはもう特に増やさず、その数でいくということか。

事務局 今日では2クラスに増やしたいということで臨んでいる。さらに増やすというところは、また考えていかないといけないと思っはいる。

委員 会議の中で、私もこれはもう既定路線で、2クラスで決まっているのだろうと思っていた。

事務局 事務局としては2クラスで考えていたため、校長先生方にはそのように事前周知をさせていただいたところである。もちろんアンケートについては策定委員会のご意見を踏まえて考えていくということではあるが、そうすると一度お伝えしたことを変更する形になる。どういう形がいいのかを考えていきたいと思う。

委員長 小・中としては、むしろ2クラスでも多いということか、もっと増やしてもいいということなのか。

委員 確かにアンケートとしては母数が増えた方が精度は上がってくるのかなという気はするが、3クラスのうち2クラスを選ぶというのはちょっと大変だなとは思っていた。

もう1つ、データとして、事務局では、Google フォームで、A中学校は9割、B中学校は6割というようなことがわかるような設定になっているのか。

事務局 基本的にはGoogle アカウントにログインして回答いただくことになるので、どの学校のデータというのを持つことは可能である。

委員 だから、9割、6割となって、「お宅の学校はちょっと回答数が少ないよ」とかいうようなことを言うか言わないかという部分と、先ほど紙の場合には強制的にやっていたということが発言の中であったと思うが、今回、Google フォームでやった場合、教員としては、「協力してくださいね」と言ってそこで終わるのか、それとも、そういう呼び掛けがあって、6割の学校には「まだやっていない人いる？」というようなもう少しせつつくようなところもあるのか。

教育委員会から下りてきたときに、学校としてその辺を教員にどのように伝えるかという部分があるかなと思う。先ほどのアンケートを答えない権利もあるというところを尊重していく姿勢なのか。もちろん、学校としては「協力してくださいよ」というような形でやるが、それ以上の強制はもうしないのか。

事務局 今回は回収までお願いしないので、校長会でも、「回答してくださいね」という呼び掛けのお願いはさせていただいた。その結果、回収率がどうなるかというのは、それはもうその結果ということで考えたいと思うので、低い学校にもう一度お願いしますとかそういったところは想定していない。そういった意味では、今回、そこでまたマンパワーを割いてしまうと、またそこも違うのかなと思っている。

2クラスということで一度処理させていただいて、もしまた増やすということであれば、またお伝えするが、まずは持ち帰って検討させていただきたい。

委員 ちょっとよろしいか。今回、Google フォームや LoGo フォームを使うことになるけれども、基本的には集計は自動集計になるという認識でよいのか。市で行ういろいろな調査は、そういったイメージで LoGo フォームをどんどん活用して電子化していくということだったと思うのだが、この調査は必ずしもそうではないのか。

事務局 いわゆる csv でデータの蓄積はされる。

委員 蓄積というか、その集計が何%になるというところまで自動的にいかないのか。

事務局 Excel で集計すれば、パーセントもすぐに出ると思う。

委員 というのは、そういうことであれば、対象をあえて絞る必要がないのかなと。先ほど副委員長がおっしゃった通り、最初に疑問になったのが、何クラスのうち何クラスだけを選定するというのであれば、学年に絞ってやるとか。そこに何か選択肢を持つというのはちょっとおかしいかなというのはずっと気になっていた。

それで、自動集計できるのだから、母体数を合わせることはあまり考えない方がいいのかなと思っていた。前回何%くらい人数が集まったから、今回もそこまで集めなけれ

ばいけないということではなく、そのデータを集計したときに、今回のそれぞれの項目で何がこのポイントになって今回の計画の中に生かしていくのかというところがポイントになる。

確かにデータが多く集まればそれはそれでいいとは思うのだが、その辺のところがいろいろ混在した中で今回の調査をかけようということしか伝わってこなかった。まず、紙ベースというのは本来できる限りなくしていこうということで子どもたちにはタブレットを渡しているわけだから、いろいろな集計を簡素化する。そこにアンケート調査をちゃんとやってもらうのであれば、その辺のところを明確にして、学校を通してなるべくやってもらうような形を取る。この学校は授業でやるけれども、この学校はやらないとかになるとまたおかしくなるので、教育委員会としてその辺のところもちゃんと明確に整理するべきなのかなという気がする。そうしないと、各学校にお願いしたときに、当然、学校によってその温度差も違う。これを子どもたちが家に帰ってやるとは思えない。

そういういろいろなことも含めて、教育委員会としてその辺の目的をしっかりとって明確にお願いをしていくべきなのかなという気がする。

スポーツについては、来年度、スポーツ推進計画に係る調査をかけて、「市民ひとり1スポーツ」という形でより特化してやっていく。それに合わせてやる内容をまたこういうところで同じように聞いても、今、委員がおっしゃった通り、スポーツの部分で何を確認して生かしていくのかが見えないところもある。その辺のところを、比較分析をするのであれば、何をもって比較分析するのかを明確に持っておいて、それ以外のもので、たぶん今回の計画をつくる上での大きな柱があると思うので、その柱に向けてどういう調査が必要なのかを整理して質問項目を作った方がよりわかりやすいかなという気がした。その辺の、データをうまく使って集計を簡単にしていってというのが基本的な考え方であったと思う。それは市のほかの計画をつくるときにもそういうイメージをみんな持っていると思う。そこだけもう1回確認しておいた方がよい。今ここで答えは出せないと思うので、意見でよい。

事務局 選択肢の3番を選んだ人が何人いたか、何割なのかは、Excelですぐ出せるので、そこは簡単に数値化することはできる。

課題があるとしたら自由意見の記載欄のところで、母数が増えるとそういったところもかなりご意見をいただくとしたら、その集計をどのようにしていくかという問題はあるかと思う。

委員 自由意見をそのデータベースに反映させるというのは、これをやると不可能になる。だから、選択肢である程度判定ができるような形にして、自由意見は意見として最後にまとめてもらうというようなやり方で私はいろいろ指示をしている。うまく効率よくやっていかないと。そのデータをどう生かしていくかというところを見ていかないといけない。

先ほどLGBTQとかの明確な表現を入れた方がいいのかどうかというところの表現の仕方というのはいろいろあると思うが、チェック項目で集計して、そこにいろんな記載が入って来ると、データの整理としては難しく、時間もかかる。その分析をするのな

ら、ちゃんとパーセンテージが出たときに、データを前回と一部比較ができるようになれば、その部分でどこがどう変わったかという分析なんだろうと思う。それは、当然、前の計画からどういうものをしてきたというのを行政側で実績をつかんでいるはずだから、それに基づいてそういう成果があったという判断でいいのだと思う。そういうところをうまく整理した方がいいのではないかな。

委員長 私も、司会であるが簡単にいくつかだけお伝えする。

市民アンケートは 2,000 人無作為抽出ということだが、これは性とか年齢とかで、市の人口構成割合が何かに揃えた形で層別化した無作為抽出なのか、もう完全に無作為なのか。例えば、年齢層別の傾向まで分析するのであれば、人口割合に揃えた形での抽出をしてもいいのかなと思った。

あと、ヤングケアラーの問題をといてるところで選択肢の表現を変えたところがあったと思うが、小学生がこの表現を聞いたときに、いわゆるヤングケアラーの世話ということを念頭に置きながら答えられるのかどうか。例えば、弟や妹の面倒を見るように親からも言われているし、お兄ちゃん・お姉ちゃんはそのものみたいなことで、世話と面倒を見るというのを本当に区別して回答するのかどうか。良いことをして回答すると、これは異なる結果となるのではないかなと思った。これでヤングケアラーを拾えるかがちょっと気になった。

あと、スマホという表現も、最近の子は iPhone が多いかなとも思うが、それとは別に、今、ガラケーがほとんどネットでは使われていないので、携帯電話という選択肢を残す必要があるのかということも気になった。

あと、相談相手に関しても、家族だけで親族まで入れなくていいのかな。例えば、片親のお子さん、あるいは普段は親がいるけれどもおじさん・おばさんが面倒を見ている人も含めて、家族だけでいいのかが若干気になった。スクールカウンセラーのところも、ほかにも専門の相談室とか相談者とかを入れなくていいのかな。また、「インターネットや SNS」を加えていただいたのは本当に今どきだなと思ったが、ネットで知り合った友達と思っている人は、選択肢 2 と 5 のどちらになるのか。今、いわゆる AI 回答みたいなのを結構子どもが使っていて、質問したり悩み事を言ったりすると AI が回答してくれる。そういう不特定の相手から返って来るような相談をこのインターネットや SNS と言っているのか。SNS やインターネットでも、もう何度もやり取りしている人は友達だと思ったら友達の方に付けるのかみたいところで、今の子どもはこの辺りの境が薄くなっているような印象を受けた。インターネットや SNS は、相談相手というよりもツールのような気もしたので、選択肢の質として、何か表現が工夫できるといいのかなかもしれないと思った。

8 その他

(1) 委員報償費について

委員報償費の振込みは、来月を目途に各委員の指定口座に振込む。

（２）策定委員会の会議録について

本委員会の議事録は、各委員に内容を確認いただいたのち、市ホームページにて公開する予定である。

（３）本日の協議を踏まえての変更内容について

本日の協議を踏まえて変更する部分については、後日、各委員にメールにて報告する。

（４）次回の策定委員会について

次回の策定委員会は年度末に開催の予定である。

以上